

第六章 浮舟と薫の物語 浮舟、右近の姉の悲話から死を願う

[第一段 薫と匂宮の使者同士出くわす]

殿の御文は今日もあり(大将殿の御手紙は今日もあります)。悩ましと聞こえたりしを(姫が病氣と申し上げたのを)、「いかが(今日はどうですか)」と、訪らひたまへり(と御見舞下さいませ)。

「みづからと思ひはべるを(自ら訪ねたいと思いますが)、わりなき障り多くてなむ(どうしても外せない所用が多くあります)。このほどの暮らしがたさこそ(あなたを京に迎えるまでの、今の待ち遠しさが)、なかなか苦しく(却ってもどかしい)」

などあり(とあります)。宮は(兵部卿宮は)、昨日の御返りもなかりしを(昨日の手紙の姫からの御返事もないのを)、

「いかに思ただよふぞ(何を御迷いか)。*風のなびかむ方もうしろめたくなむ(大将の強引さにあなたが引かれないかと心配だ)。いとどほれまさりて眺めはべる(私の方がよほど熱心にあなたを待ち侘びています)」 *「風のなびかむ方も」は注に<明融臨模本、朱合点。『異本紫明抄』は「浦風になびきにけりな里のあまの焚く藻の煙心弱さに」(後拾遺集恋二、七〇六、藤原実方)。『弄花抄』は「須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」(古今集恋四、七〇八、読人しらず)を指摘。>とある。後拾遺集の歌は「千人万首」サイトの「藤原実方(ふちはらのさねかた)」ページを頼ると、詞書に「語らひ侍りける女の異人に物言ふと聞きてつかはしける」とあるらしく、「語らひ侍りける女」を「里の海人」と言っているようだが、是は本当に恋の情緒の歌なんだろうか。私が受ける「さとのあま」の語感は<色街の女>か<実家の女房=召人>で、大体が自分の無沙汰で女を寂しがらせて置いて、女が他の男に靡いたのを、女の「心弱さに」と言って退ける歌筋からして本気よりは遊びを思わせる。で、自分の無沙汰を<不熱心さ→風向きの弱さ>と然も風流に言い換えて、「里」の女だけに<より強い海風=強引な男>に靡いたんだな、と理屈で納得するという小賢しさ。で、この歌を相手の女に「遣はしける」というオトボケ振りは、アクト・ナチュラルな冗談ソングとしか聞こえない。尤も、古今集の歌の「風を痛み」も<風を甚く受けて=強引に誘われて>という遊び気分は同種だろう。ただ、公然と構えた夫婦関係が真実で、私的な浮気は虚偽なのかと言えば、それは事態の善悪が個体と社会制度との折り合いの問題となるだけで、真偽は個体に内在するので客観的な概念規定は無意味であり、恋愛が制度上の善悪で始まるものでないのは、実態としても言語定義としても自明だ。しかし、多くの人にとって社会制度およびその通念は、折り合う余地など全く無しに圧倒的に個人を制するので、遊ぶ意欲よりは面倒を避ける日常を選択する。

など、これは多く書きたまへり(などと此方は言葉多く書いていらっしやいました)。

*雨降りし日(先だつての三月初旬の、雨の日に)、来合ひたりし御使どもぞ(宇治山荘に来合わせていた兵部卿と大将の文遣いたちが)、今日も来たりける(この日も山荘に来ていました)。殿の御隨身(大将殿の御使者の近衛護衛官は)、*かの少輔が家にて時々見る男なれば(その使者が仕事で立ち寄る式部少輔の家で時々見掛けた男だったので)、 *「雨降りし日」は注に<前に「雨降りやまで日頃多くなるころ」とあった、晩春三月の春雨の中、来合わせた使者たち。>とある。三月初旬のこと、かと思う。 *「かのせうがいへにて」は注に<薫の隨身は、相手が式部少輔兼大内記道定の家で時々会う下男だったので、の意。>とある。この隨身が式部少輔兼大内記と個人的に親しいのか、業務上で立ち寄るのかは不明だが、個人的

な関係に触れることもなく、日常的に普通の事のように語られていることから、護衛官業務で立ち寄り、と見て置く。それと、此処の注には大内記を「道定」と呼称しているが、左様な固有名詞は初見だ。後述されるのだろうが、その事の説明も此処で示して置いて欲しい。

「*真人は、何しに、ここにはたびたびは参るぞ(おぬしは何しに此処にたびたび参るのか)」
*「真人」は「まうと」とよみがある。「真(ま)」は尊称・美称を示す接頭語とのこと。「まうと」は<「まひと」の音便。相手を尊んでいう第二人称。>と古語辞典にある。侍同士なら江戸時代劇風に<おぬし>あたりが馴染むか。

と問ふ(と問います)。

「私に訪らふべき人のもとに参うで来るなり(私用で知り合いの女房に会いに来ています)」

と言ふ(と相手の使者は言います)。

「私の人にや(自分の手紙で)、艶なる文はさし取らす(そんな風流仕立てにして届ける、というのか)、けしきある真人かな(あやしいな)。もの隠しはなぞ(隠し立てするな)」

と言ふ(と隨身は言います)。

「まことは、この*守の君の、御文(本当は、主人の出雲守の御手紙を)、女房にたてまつりたまふ(女房にお届け申します)」 *「守の君(かんのきみ)」は注に<主人の国司(出雲権守)の君の意、時方。>とある。後述されるのだろう。が、時方は「御乳母子の蔵人よりかうぶり得たる若き人」(二章二段)と先ず語られ、後は如何にも側近の蔵人らしく「時方」と個人名で呼称されるか「大夫(たいふ、五位蔵人)」と呼称されてきた。そして、此処では公職官名で呼ばれたわけだが、是は従者が主人を立てて、公人としての身分を示したもので、家人なればこそその言い方なのだろう。国司と言っても権官だから任地へ赴任せず、在京のまま国司相当の俸禄を得るということらしく、現地の実質国司である受領が自分の裁量で私腹を肥やすのに比せば収入額は一定の役職報酬だったようだが、要人の側用人を言う「蔵人」よりは「国司」の方が公人資格は示せたのかも知れない。が、実際の権限は王家および公卿の威光が圧倒的で、「蔵人」である事のほうが遥かに重要だったのだろう。また、この時方の従者が大内記の家に入入りしていたのは、時方と内記が兵部卿の意向を汲んだ計画を綿密に打ち合わせをしていた証左でもあるのだろう。

と言へば(とその使者が言うので)、言違ひつつあやしと思へど(返事が変わって怪しいとは思ったが)、ここにて定め言はむも異やうなべければ(此処で問い詰めるのは場違いなようなので)、おのおの参りぬ(それぞれ役目を果たしました)。

[第二段 薫、匂宮が女からの文を読んでいるのを見る]

かどかどしき者にて(この隨身は機転が利く者なので)、供にある童を(供に連れていた童子に)、

「この男に、さりげなくて目つけよ(この男に気付かれぬように後を尾けよ)。*左衛門大夫の家にや入る(はたして左衛門大夫の家に入るものやら)」 *「衛門大夫(ゑもんのたいふ)」は<衛門府の大尉で五位蔵人の者>のことらしい。大尉および少尉は<タイイ>や<ショウイ>ではなく「じょう」と読むらしく、大宝律令(701年制定)で定められた行政組織の官位制の内、四等官制で長官(カミ)、次官(スケ)に注ぐ三等官の判

官(ジョウ)の地位で、組織上の役割は現場統括あたりで、兵衛府と衛門府では「尉」の漢字を当てた、ということらしい。大少は正副の階級差で職掌は同じらしい。で、衛門府の大尉は官位表によれば従六位相当官なので、五位の者が就くのは特に要人警護の場合らしく、御指名の雅な響きが「衛門大夫」にはあるのかもしれない。時方は左衛門府の大尉でもあったらしい。

と見せければ(と見張らせると)、

「*宮に参りて(御使者は兵部卿宮邸に入って)、式部少輔になむ、御文は取らせはべりつる(式部少輔に宇治からの御返事を渡しました)」 *「宮」は兵部卿宮邸だろうが、是が二条院なのか、六条院なのか判然としないが、後文から察すると、この「宮」は二条院で内記が文遣いから手紙を受け取ったが、兵部卿自身はこの時、中宮を見舞う為に六条院に出向いていて、内記が六条院に手紙を持参することになるようだ。こういう先読みは語り手の話し運びの段取り意図、とは即ち舞台演出を邪魔しかねないので極力避けたいが、混み入った事情の割に本文では説明が少ないので、私の混乱を避けるために少し整理して置く。

と言ふ(と童子は言います)。さまで尋ねむものとも(そこまで調べるとは)、劣りの下衆は思はず(凡庸な下侍は思わず)、ことの心をも深う知らざりければ(自身が兵部卿の遣いだという事情も良く分かっていなかった)、秘匿への用心も少なく)、*舎人の人に見現されにけむぞ(大将家の本家抱えの侍に勾宮の密偵を見破られたとは)、口惜しきや(残念でした)。 *「とねりのひと」は注に<『集成』は「薫の使者の隨身のこと。「舎人」は、近衛の舎人、また近衛府の将監(三等官)以下が勤める。「舎人の人」は「劣りの下衆」に対して、いっばしの舎人、といった気持。以下「くちをしきや」まで、草子地」と注す。>とある。

殿に参りて(隨身は三条宮邸の大將殿の御座所に参上して)、今出でたまはむとするほどに(今お出掛けなさろうという所に)、御文たてまつらす(宇治からの御返事をお届け申します)。直衣にて(薫大将は略礼装で)、六条の院、後の宮の出でさせたまへるころなれば(六条院に中宮が里下がりなさっている時なので)、参りたまふなりければ(御見舞に参上なさるところなので)、ことごとく(御所参内のような格式張ったこともなく)、御前などあまたもなし(随行者も多くありません)。御文参らする人に(隨身は御手紙を取り次ぎ申す女房に)、

「あやしきことのはべりつる(妙な事がございまして)。見たまへ定めむとて(事の真相を見定める為に)、今までさぶらひつる(今の帰参となりました)」

と言ふを(と伝言申すのを)、ほの聞きたまひて(薫殿は聞き付けなさって)、歩み出でたまふまに(部屋を出ていらっしゃりながら)、

「何ごとぞ(何があった)」

と問ひたまふ(と隨身にお尋ねになります)。この人の聞かむもつつましと思ひて(隨身は取次女房が聞くのを不都合に思って)、かしこまりてをり(黙って控えています)。殿もしか見知りたまひて(殿もその隨身の態度から混み入った話らしい事情を察しなさって)、出でたまひぬ(そのままお出掛けなさいました)。

宮、例ならず悩ましげにおはすとて(中宮は思わしくなく御不調でいらっしやるという事で)、宮たちも皆参りたまへり(皇子たちも皆参集なさっていらっしやいました)。上達部など多く参り集ひて、騒がしけれど(高官たちも多数参集して落ち着かないが)、ことなることもおはしませず(中宮は格別変わった御容態ではいらっしやいません)。

かの内記は、*政官なれば、遅れてぞ参れる(ところで内記は宣旨を奉る書記官なので、この見舞の席にも遅れて参上します)。この御文もたてまつるを(そしておもむろに、この宇治からの御返事も奉るわけですが)、宮、*台盤所におはしまして(兵部卿宮は台所にいらっしやって)、戸口に召し寄せて取りたまふを(内記を戸口に呼び寄せて御手紙を受け取り為さるのを)、大将、御前の方より立ち出でたまふ(大将殿が中宮の御部屋から退出なさろうと、少し開けた襖戸から)、側目に見通したまひて(北奥の台所を横目に見通しなさって)、「せちにも思すべかめる文のけしきかな(あんな所で受け取るとは、よほど大事にお思いの手紙のようだ)」と、をかしさに立ちとまりたまへり(と興味を引かれて立ち止まりなさいました)。*「政官」は「じゃうぐわん」と読みがある。大辞泉には<太政官(だいじょうかん)の職員。特に、弁・少納言・外記(げき)・史生(ししょう)などをさす。>とある。参議以上の諸侯とは違って、記録文書の作成・管理などの処理を司る事務技術者のことらしい。内記は行政組織構成上は中務省に属するが、実務としては相当に専門性の高い文書係で、実際に学識者が任官されたようで、政務局の司直と同類同様に政官と通称されたらしい。だから、此处での「政官」の語用はほぼ<書記官>だろう。では何故、書記官だと<遅れて来る>ことを皆が納得するのか。それは多分、列席者が揃った所で、書記官が帝の宣旨を議場に運び入れるからなのだろう。しかし、此处は議場ではない。見舞いに参すべき中宮の御座所である。つまり是は洒落語用の冗句で、文意としては「この御文もたてまつる」の枕詞だ。*「だいばんどころ」は<台所>で北の対ないし北奥棟にあるのだろう。中宮は春の町の寝殿母屋を御座所にしている筈で、恐らく見舞客は南表の廂や縁側に参集している。だから匂宮は人目を避けて、台所に内記を呼び付けた、のだろう。しかし、勝手知ったる薫殿は「騒がし」い南表を避けて北廂から中宮の御前を退出した、のだろう。

「引き開けて見たまふ(宮が引き開けて御覧になっている手紙は)、紅の薄様に(如何にも恋文らしい赤い便箋に)、こまやかに書きたるべし(びっしりと書いてあるものらしい)」と見ゆ(と見えます)。文に心入れて(宮は手紙に夢中で)、とみにも向きたまはぬに(とんと振り向きなさらないが)、大臣も立ちて外ざまにおはすれば(源大臣も見舞を終えて出ていらっしやるので)、この君は、障子より出でたまふとて(薫殿は襖戸から廊下にお出になって)、「大臣出でたまふ(大臣が出ていらっしやいます)」と、うちしはぶきて(と咳払いして)、驚かいたてまつりたまふ(匂宮に御注意申し上げなさいます)。

ひき隠したまへるにぞ(宮が手紙を懐へ引き隠しなさいったところに)、大臣さし覗きたまへる(源大臣が廂から廊下にお顔を差し出しなさいました)。驚きて御紐さしたまふ(宮は驚いて上着の前紐を掛け留めなさいます)。*殿つい居たまひて(大臣は匂宮に敬意を表して膝まずきなさいり)、*「殿」は薫殿ではなく、源大臣のことらしい。非常に紛らわしいが、下文は源大臣の言葉らしいし、この場面展開と、当時の人間関係や生活感からして、是が普通の言い方ということになるらしい。匂宮は源大臣にとって甥であり娘婿だが、何よりも先ず、今上帝の三の宮なのである、ということか。

「まかではべりぬべし(私は退出致そうと存じます)。*御邪気の久しくおこらせたまはざりつるを(御病気が暫く治まっていられっしやったのに)、恐ろしきわざなりや(またお悪くなって、恐

ろしいものです)。*山の座主、ただ今請じに遣はさむ(叡山の座主を直ぐ呼びに遣らせましょう)」
*「おおんじゃけ」は「もののけ」に同じ。>と古語辞典にあるが、むしろ「もののけ」が「邪気」のこと、と言うべきではないのか。「もののけ」の「もの」は、それが何と客観的に置き換えては概念規定できないが、誰もが感じ取る「厭な何かの存在」>のことで、「け」は「その気配」だから、「もののけ」は禍をもたらす靈魂や妖気や邪気など訳の分からない不吉な事物を指すが、「邪気」は不吉な事物の内の「筋違いの祟り」あたりの一部を指す語感で、是を「もののけ」と言い換えるよりは「御病気」と言った方が私には順当に聞こえる。 *「やまのざす」は注に「比叡山の天台座主。」>とある。

と、急がしげにて立ちたまひぬ(と言って慌しく立ち去りなさいました)。

[第三段 薫、隨身から匂宮と浮舟の関係を知らされる]

夜更けて、皆出でたまひぬ(夜が更けて皆中宮の御前を退出なさいます)。大臣は、宮を先に立てたてまつりたまひて、あまたの御子どもの上達部、君たちをひきつけて、あなたに渡りたまひぬ(源大臣は匂宮を先に立て申しなさって多くの御息の高官や若君たちを引き連れて夏の町に引き上げなさいました)。この殿は遅れて出でたまふ(薫大将殿はその後でお帰りになります)。

隨身けしきばみつる(隨身が混み入った話がありそうだったので)、あやしと思しければ(不審にお思いだったので)、*御前など下りて火灯すほどに(従者が乗車なさった殿の御前を下がって道案内の灯火を用意する時に)、隨身召し寄す(大将は隨身を呼び寄せなさいます)。 *「御前」は「おまへ(貴人との対面)」ではなく「ごぜん(御前駆、貴人車両の先導役従者)」らしい。だったら、漢字表記は「御前駆」とすべきかと思うが、この場面自体が見慣れない所為か、いやに分かり難い言い方に聞こえる。が、是が発時の手順だと知っていれば、むしろ普通の言い方と分かるのかもしれない。

「申しつるは(さっきの話は)、何ごとぞ(何だったんだ)」

と問ひたまふ(と尋ねなさいます)。

「今朝、かの宇治に、*出雲権守時方朝臣のもとにはべる男の(今朝、あの宇治山荘に出雲権守時方朝臣に仕えている下侍が)、紫の薄様にて、桜につけたる文を(紫の薄様で桜の枝に結び付けた恋文を)、西の妻戸に寄りて、女房に取らせはべりつる、見たまへつけて(西表の妻戸に近付いて女房に渡していたのを見つけまして)、しかしか問ひはべりつれば(どういう手紙かと聞き出しましたら)、言違へつつ、虚言のやうに申しはべりつるを(返事を言い換えては虚言のやうに申しましたので)、いかに申すぞ、とて(どういうことだろうかと)、童べして見せはべりつれば(童子に後を見張らせました所)、兵部卿宮に参りはべりて(その文遣いは兵部卿宮邸に入り申して)、*式部少輔道定朝臣になむ、その返り事は取らせはべりける(式部少輔道定朝臣に、その返事を渡し取らせたのでございます)」 *「出雲権守時方朝臣(いづものごんのかみときかたのあそん)」と、此処に初めて蔵人時方の公式の官職名が明示された。 *「式部少輔道定朝臣(しきぶのせうみちさだのあそん)」と、此処に初めて識者内記の公式の呼称が明示された。「朝臣(あそん)」は「五位以上の廷臣の敬称。」>と古語辞典にあり、五位以上は殿上の大夫だから、二章九段の兵部卿宮が宇治から帰京する際に「この五位二人なむ(この京を往復した時方ともう一人の五位大夫の二人が)、御馬の口にはさぶらひける(宮の御馬の口取りを勤めます)」とあった、時方ともう一人の五位大夫は、やはりこの道定朝臣だったのかもしれない。

と申す(と隨身は申します)。君、あやしと思して(薫君は、先に見た兵部卿宮が内記から手紙を受け取りなされた光景を疑念に感じて、こうお聞きになります)、

「その返り事は、いかやうにしてか、出だしつる(その返事はどんな形だったか)」

「それは見たまへず(それは見ておりません)。異方より出だしはべりにける(別の場所で渡したようです)。下人の申しはべりつるは(尾行した若侍の申すところでは)、赤き色紙の、いときよらなる(赤い便箋のととてもきれいなもの)、となむ申しはべりつる(とのことです)」

と聞こゆ(と隨身は答えます)。思し合はするに(薫殿は思い合わせなさると)、違ふことなし(その返書は匂宮が御覧になっていたものに間違いありません)。さまで見せつらむを(隨身がそこまで調べたのを)、かどかどしと思せど(薫殿は機転が利くとお思いになるが)、人びと近ければ(他の従者も近くにいたので)、詳しくものたまはず(この場ではそれ以上は仰いません)。

[第四段 薫、帰邸の道中、思い乱れる]

道すがら(薫君は帰途の間)、「なほ、いと*恐ろしく(やはり実に恐ろしく)、*隈なくおはする宮なりや(思い残しをなさらない宮だな)。いかなりけむついでに(どういう折に)、さる人ありと聞きたまひけむ(あの女があそこに居るとお知りになったのか)。いかで言ひ寄りたまひけむ(どのように人目に触れず、姫に言い寄りなされたのか)。田舎びたるあたりにて(田舎じみた宇治なら)、*かうやうの筋の紛れは(文遣いでも人目に立って、誤魔化しは)、えしもあらじ(利かないだろう)、と思ひけるこそ幼けれ(とと思っていたのが浅はかだった)。*「おそろし」は<大空しい=計り知れない大きさだ=想定外だ=思った以上に>みたいな語感だろうか。驚くべき、でも良さそうだが、そのまま<恐ろしい>で現代語に続いているかと思う。*「くまなし」は<抜け目ない→隙が無い>というより<陰りが無い→すっきり残らず>という語感かと思う。薫殿は、常陸姫が匂宮に言い寄られて居た堪れず二条院を去った、という事情を聞き知っている。そのことが、薫君をして、姫を強引に宇治に隠れ住まわせることを決意させた、少なからぬ一因ではあったのだろう。姫を京に置いて置いては薫君は匂宮の手出しが不安だった。だから、姫を宇治へ移して安心した。去年の八月末のたった一回の出会いであり、それも未遂だったのだから、暫く経てば匂宮も忘れるだろう、と薫君は思ったのだろう。多分、それは常陸姫も同じ思いで、だから若君に正月飾りを贈っても、仮にそれが兵部卿の目をかすめても、もう自分は忘れられた女だろう、とと思っていた、のだろう。しかし、兵部卿宮は姫を忘れていなかった。それは、姫自身に備わった品性が格別だったから、ではあるのだろうが、薫君に化けて姫を抱いた、という姑息さは、姫を大事に思うというよりは薫君の鼻を明かすことを面白がったように見える。ただ、情交した後は宮も姫も、どうやら意外にも相手が好きになってしまったみたいで、端然とした二枚目かと思っていた薫君が三枚目になる、という展開が用意されていた。尤も、薫君の端然さは故姉君が憎んでいたように、作者は初めから、その実、召人相手に憂さを晴らす薫君の気紛れと鼻で笑っていた節はある。いや勿論、憂さ晴らしをするのが健康な男だ、という至極真っ当な認識に立てばこそで、この作者は王家も源氏も藤原氏も、一皮剥いた本音で生きていて、その生き様は多くの人々の日常と変わらない、と共感を誘いつつ、その一皮を紡ぐ為に多くの人々が英知を凝らしている価値観の尊さを訴えてもいて、その洞察眼の深さに驚嘆するが、もしかすると丹念に実相を追っているだけかも知れない。少なくとも、軍事態勢を取る為、島国事情で結果的に残ったに過ぎないにせよ、伝統を守ってきた形式神官の天皇家を神格化する、という男の御都合主義の薄っぺらさは耐えられない、と嘆いているように、この物語を今に照らせば私には聞こえる。*「かうやうの筋の紛れ」は、この時点での薫君の認識では、匂宮

が常陸姫と文通しているらしい、という疑いで、まだ寝取られていることには気付いていないようだから、隨身が見付けたく匂宮の文遣いを時方の手紙のように言う誤魔化し>のことなのだろう。

さても(それにしても)、知らぬあたりにこそ(私が知らない女なら)、さる好きごとをものたまはめ(そういう色遊びもなされば好いが)、昔より隔てなくて(昔から親しくして)、あやしきまでしるべして(怪しい手引きまでして)、率てありきたてまつりし身にしも(山荘にお連れ申し上げたこの私の女に言い寄るとは)、うしろめたく思し寄るべしや(気が咎めなさらぬものか)」

と思ふに、いと心づきなし(と思うと、実に不愉快です)。

「対の御方の御ことを、いみじく思ひつつ、年ごろ過ぐすは、わが心の重さ、こよなかりけり(対の御方のことを非常に恋しく思いつつも、手出しせず何年も過ごしてきたのは私の自制心が強かったからだ)。さるは、それは(それにそれは)、今初めてさま悪しかるべきほどにもあらず(今に始まった邪まな恋情でもない)。もとよりのたよりもよれるを(もともと故姉君が妹君の世話を私に託していたものを)、ただ心のうちの隈あらむが(妹君を思うのは、偏に私の姉君への誠意に影を落とすと)、わがためも苦しかるべきによりこそ(自分の良心に背くようで)、思ひ憚るもをこなるわざなりけれ(遠慮して匂宮に妹君を譲り申したのも、こうして匂宮に裏切られては、馬鹿を見てしまう)。

このころかく悩ましくしたまひて(匂宮は最近はいよいよご体調を悪くなさって)、例よりも人しげき紛れに(いつもよりも見舞客で人の出入りが多い中で)、*いかではるばると書きやりたまふらむ(どんな思いで遠い宇治まで手紙をお書きなさるといふのか)。*おはしやそめにけむ(もう宇治へいらっしゃったのだろうか)。*いと遙かなる懸想の道なりや(いや、ご自身が出向くには、とても遠過ぎる恋の道だよ)。*「いかではるばると書きやりたまふらむ」の「らむ」は現在推量の助動詞だから、是は今回の匂宮の手紙の意思を薫殿が推察している文なので、この「いかで」は<宮はどんな気持で>という言い方だ。*「おはしやそめにけむ」の「けむ」は過去推量の助動詞だから、是は宮がくもう宇治へ行き始めなされたらうか→もう姫に会ったのか>という薫君の疑念だ。*「いと遙かなる懸想の道なりや」の「なりや」は、「おはしや」と自問したことに、諸事情を考慮して結論を推定したことを示す助動詞「なり」に、その自答の論拠に十分妥当性があると踏んだ余裕を示す間投助詞「や」が付いた言い方、かと思う。で、その推論は「おはしや」を否定する結論なので<いや>と反語を補語して置く。つまり、この時点では薫君は、匂宮がまだ常陸姫とは会っていない、と読んでいることを示す文なのだろう。

*あやしくて(しかし、宮は京にご不在で)、おはし所尋ねられたまふ日もあり(居場所を探されなされた日もあった)、と聞こえきかし(と聞いた事もある)。*さやうのことに思し乱れて(いや、そうか、これはどうやら、宮と姫は既に出来ていて、その上で、容易に会えないことに思い悩みなさって)、そこはかたなく悩みたまふなるべし(それで何となく元気をなくしていらっしゃるといふ事のような)」、*昔を思し出づるにも(と薫殿は昔の宮と妹君のことを思い出されなさるにつけても)、「えおはせざりしほどの嘆き(宮が宇治にいらっしゃれない不自由さを嘆くのは)、いといとほしげなりきかし(実にお気の毒そうだったしな)」 *「あやしくて」は<(宮の居所が)不明で>という意味らしい。匂宮は宇治へ出掛けた時に厄払いを方便にして、行き先を誤魔化していた。だから薫殿は、その不明時に匂宮は宇治へ行っていたのではないかと疑いを持った、のだろう。ところで、この文意は上文の「いと

遥かなる懸想の道なりや」とは全く矛盾する。つまり薫殿は、一応は「いと遥かなる」と安心したものの、よくよく考えてみれば、匂宮が宇治へ行っていた可能性は否定できない、と改めて気づいたのであり、上文とこの「あやしくて」の間には暫しの考察時間が要されたはずで、語りは間を空けるだろう。そして、薫殿は前の考えを翻したのだから、現代文としては<しかし>と逆接の接続詞を使わないと、論理構文が示せない。*「さやうのこと」の代名詞語用は分かり難い。この「さやう」は、一通りの考察を此处で考え直した、という文脈上での<左様>だから、上記の<いと遥かなる懸想の道なりや=匂宮はまだ姫に会っていないだろう>という事情ではなく、匂宮は不在時に姫に会ったらしいが<いと遥かなる懸想の道なりや=そう容易には再会できない>に変容した事情が代入されるようだ。こう言ってしまうと、是で理屈は通って話が済んだかのように見えるが、会ったかどうか、は、情交したかどうか、と同義なので、此处で薫殿が、匂宮と常陸姫は既に会っている、と思い、その確認を試みる考察を続ける、ということは、物語の展開上は非常に重要な分岐点である事を意味する。だというのに、いや、もしかすると、この薫殿の微妙な心理の揺れを表現する意図からか、しかし、それにしても、とにかく如何してこんな中途半端な言い方をするのか、と思うほどの是は難文で、「『源氏物語』ウェブ書き下ろし劇場」サイトの当該訳文を参照して、この文に<そうか>と此处で真相らしきものに気付いたかの補語が施されていたことで、やっと、だいぶ理解し易くなったくらいだ。本文でも「さなむ」とか語られていれば余程分かり易いかと恨めしい。どうも古文は、助詞や助動詞の論理性は高そうだが、接続詞や論理構文の記号表示に於いて不十分で、主語や目的語の省語と共に文意表現の客観性が足りないようだ。いや、客観表現など臨場表現に遠く及ばない、という面が言語にはある、にしてもだ。と、文句の一つも言いたい。*「昔を思し出づるにも」は注に<主語は薫。『集成』は「ここからは地の文」。『完訳』は「薫の心内語に、語り手による尊敬語がまじる」と注す。>とある。確かに、「思し」と尊敬語になっているので、此处は地文と読んで置く。

と、つくづくと思ふに(と薫殿は色々と突き合わせて考えてみると)、女のいたくもの思ひたるさまなりしも(女がずいぶん物思いに沈んだ様子だったのも)、片端心得そめたまひては(その一端が納得出来なさり始めると)、*よろづ思し合はするに(後は全ての事柄が左様の事情に符合して思えなさり)、いと憂し(宮と姫の情交が確信されて、実に情けない)。*「よろづ思し合はするに」は上文の「さやうのこと」を受けていて、この文からも「さやうのこと」が<宮と姫が既に情交している>という薫殿の認識である事、と分かる。というか、だから此处の文意も分かり難い。もしかすると、この薫殿が匂宮と姫の裏切りに気付く場面が、この物語でのかなりの重要箇所と位置付けて、作者は丁寧に渾身の作文表現を試みているのかも知れない。そして、それは当時の読者にも評価されて、此处は名場面と見做されていたのかも知れない。そして私も、此处が重要な場面だとは分かる心算だが、あまりにも難文で、臨場感に浸って物語を楽しむというところには、とてもじゃないが至らない。

「*ありがたきものは(分からないのは)、人の心にもあるかな(人の気持だ)。らうたげに*おほどかなりとは見えながら(可憐で落ち着いた性格に見えたが)、色めきたる方は添ひたる人ぞかし(姫は情事好きな面があったらしい)。この宮の*御具にては(そういう宮の遊び相手としては)、いとよきあはひなり(全くお似合いだ)」*「ありがたし」は<有り得ない→考えられない→分からない>。今でも<人の気持は分からないものだ>は普通に言う言い方だ。*「おほどか」は<おうようだ。どっしりして動じない。過敏でなしに落ち着いている。>と高評価の語用が多いのかもしれないが、物事に動じないという態度は<鈍感だ。性戯に疎い。性反応が悪い。>という見方も出来る。尤も、姫の性反応が悪いというのは、薫君の性戯が拙い所為かもしれず、必ずしも姫の特性とは言えない。この「らうたげにおほどかなり」には、作者が薫君を皮肉っている響きが強く感じられる。*「おおんぐ」の「具」は古語辞典に<原義は「伴うもの」の意。>とあり、用例に<配偶者。相手。添え物。道具。用具。>などとある。此处では「色めきたる方は添ひたる」という見方で、そういうく

御相手>として考えているのだから、この「御具」は<宮の側女、召人、遊び女>ということなのだろう。薫殿は自分を裏切った宮と姫を、ただ欲情に溺れた男女と見做して、先ずは見放したい気持ちに駆られたのだろう。「この宮」も「御具」も吐き捨てるように言った悪口の語感だ。が、そのように姫を見做すということは、薫君自身が姫を<召人>と考えているということにもなって、それで自分の気は済むのか、姫はそういう存在で良いのか、という反省が、新居を構えてまで世話するに値すると思っただけで来た女になら、薫君に直ぐに起こって当然だ。それに元々「具」という語自体は、一定の想念に見合った資質・性能のある物性、という概念を示すようで、「御具」を<（全てが備わった）御正妻>と語用する文脈も成立する場合はありそうだ。だから此処でも、そういう含みもあつての「御具」の語用でもあるようで、何かとても用意周到な話し運びにも見える。

と思ひも譲りつべく（と薫殿の考えも、裏切られたなら此方も見限ろうと、売り言葉に買い言葉よろしく、姫を宮に譲ってしまいたく）、*退く心地したまへど（縁を切りたい気持ちがなさったが）、*「退く」は「しぞく・しりぞく」の<引き下がる、身を引く>という言い方ではなく、「のく」と読みがあるので<除く、関係を絶つ。縁を切る。避ける。手を引く。去る。>という言い方らしい。

「*やむごとなく思ひそめ始めし人ならばこそあらめ（特に大事な初恋の故姉君の形代と見做した姫なのだから）、なほさるものにて置きたらむ（引き続き見捨てずにいよう）。今はとて見ざらむ、はた、恋しかるべし（これきり会わないなんて、やはり悲しい）」 *「やむごとなし」は<これ以上無い高貴な身分>という言い方の<王家の尊厳>を示す語用が多い。その所為か、注には此処の文意を<以下「恋しかるべし」まで、薫の心中の思い。正妻にする女であったら、の意。>としてある。ということは、薫殿は常陸姫を正妻に据えようと考えたことなど無いので、此処の「こそあらめ」の理由項提示を逆接構文に解していることになるが、それでは「なほさるもの」という現状維持認識が成立しない。曲解である。本文に現状維持が示されている以上、この「こそあらめ」は順接なのであり、ということは、この「やむごとなし」は<止む事無し→見捨てられない→特別大事だ>という本来の語用と取る他はない。

と*人悪ろく（と薫殿は帰宅後も、女房が変に思うほど考え続けて）、いろいろ心の内に思す（いろいろと内心でお思いになります）。*「ひとわろし」は<体裁が悪い。見つともない。>という一般語用の形容句のように見えるが、先に「道すがら」（段頭）とあつて、薫殿が車内で独り思う心中文が続いて来たかの場面設定からすると、車内に元々人目はないのだから、是は少し変な形容だ。少し、というのは、そうはいつでも、考えている事柄が<外聞が悪い。公然と出来ない。>という語用も「人悪ろし」にはありそうで、此処の形容に適合しそうだからだが、それはこの事柄自体が初めからそういう事案なのであり、此処で特に「人悪ろし」を言うのは、その含みもあつての洒落語用とは見るべきなのだろう。つまり、この「人悪ろし」は、今は人目がある、とは即ち三条宮邸に帰り着いている場面、と読まされることになりそうだ。だから、既に帰宅しているという場面設定、並びに敢えて女房目線の存在、も補語して置く。あと、ちょっと気になるのが、少し前にあつた「つくづくと思ふに」は<家に到着しても尚>という洒落語用だろうか、とも思うが、それは明示補語するまでの確信は持てない。

[第五段 薫、宇治へ隨身を遣わす]

「我、*すさまじく思ひなりて（私が姫に興味を失くして）、捨て置きたらば（見捨てたら）、かならず、かの宮、呼び取りたまひてむ（必ず兵部卿宮が迎え取りなさるだろう）。人のため（姫にとって）、後のいとほしさを（将来に憂いない処遇も）、ことに*たどりたまふまじ（宮は特には配慮なさないだろう）。*さやうに思す人こそ（宮はそのように情人として気に入った女を）、*

一品宮の御方に人、二、三人参らせたまひ*たなれ(女一の宮の上臈として二、三人仕えさせなさったらしい)。さて(そのように姫が他人の下で尽くす女房として)、*出で立ちたらむを見聞かむ(出仕することを見聞きするのは)、*いとほしく(目を掛けた自分が蔑ろにされるようで、気に入らない) *「すさまじ」は<気がすさむ。興味を失くす。>。 *「たどる」は此処では<順を追って考察を進める→配慮する>。 *「さやう」は<情事の相手=遊び女=召し人>。 *「一品宮(いっぽんのみや)」は<女一の宮>のことらしい。公式の処遇としては、親王の身分待遇を示す「品(ほん)」は後見家がどれだけ儀式の規模を負担できるかによって定まり、最上位の「一品位(いっぽんい)」は立太子に適う親王に宣下され、内親王には最上位で「二品」だと入道宮の処遇の際に見たように思う。ただ、明石中宮腹の長女で、六条院春の町の東の対に住む姫宮が、現下の最上位の内親王であることは衆人の認めるところだろうから、このように広く通称されたのだろう。 *「たなれ」は、古語辞典に<「たるなり」の音便形「たんなり」の撥音の「ん」を無表記したもの>と説明される「たなり(～したらしい)」という語の已然形。 *「出で立ちたらむ」の主語は常陸姫。また実際に兵部卿宮は、船宿遊びの際に姫を女房に見立てた女房ごっこをしてはしゃいでいた(四章六段)。 *「いとほし」について、渋谷訳文は<(姫が)気の毒なことだ>とあり、与謝野訳文は<自分は見るに忍びないつらさを味わうであろう>とある。理屈を捏ねる心算はないが、現に本文には「見聞かむ」ことが「いとほし」とあって、「出で立ちたらむ」ことが「いとほし」と言っているのではなく、「出で立ちたらむ」の主語は常陸姫だろうが、「見聞かむ」の主語は薫君自身だから、取り敢えず渋谷訳文の<(姫が)気の毒なことだ>という解釈は成立しない。となると、此処の文意は与謝野訳文の<自分は見るに忍びないつらさを味わうであろう>という筋が良さそうだ。確かに、「いとほし」は薫君自身が「つらさを味わう」ということのようなのだが、「見るに忍びない」というのは、どういう根拠でどういう内容を示しているのか。それは、姫が「出で立ちたらむ」ことが、姫にとってどういう意味なのかは、一先ず左置き、薫君にとって<屈辱のだ>ということが「見るに忍びない」ことの内容なのであり、そういうことになる根拠は<姫の価値を認めた薫君の自尊心を傷付けるからだ>という理屈が立ちそうだ。と結局は、さんざ理屈を捏ねてしまった。

など、なほ捨てがたく(などと薫大将は姫を尚も見捨て難く)、けしき見まほしくて(様子を知りたくて)、御文遣はず(御手紙を遣わします)。例の隨身召して(例の隨身を呼び出して)、御手づから*人間に召し寄せたり(直接に人の居ない間に手渡しなさいました)。 *「人間に(ひとまに)」は<人の居ない時に>という副詞語用、と古語辞典にある。

「*道定朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ(道定は今でも仲信の家に通っているのか)」 *注に<以下「家にや通ふ」まで、薫の詞。『集成』は「道定の朝臣(大内記)は、今でも仲信の家に通っているのか。仲信の女との夫婦仲について問う。匂宮と女を張り合っているとは、あくまで隠したく、道定自身が浮舟に懸想していると思わせるための用意」と注す。>とある。仲信は大將家の家司で(二章四段ほか)、官職は大蔵大輔(五章三段)とあり、その娘婿が兵部卿側近の大内記で式部少輔でもある道定であり、「通ふ」とあるのは道定が仲信の家に<通い婚をしている>という意味らしい。ということは、この薫殿の問い掛けは、道定は妻のある身で他の女に言い寄る気が多い男だ、という人物像を隨身に植え付けようとしている、ものらしい。というのも、隨身は宇治山荘からの返書を使者が道定に届けた、という事実を聞き知っているのだから、薫殿は隨身にこの事態を、道定が宇治の女と通じている、という事情のように思い込ませようとした、かららしい。が、それでも、右近が兵部卿の使者からの手紙を、時方大夫から右近への恋文だと他の女房に言っていたこと(三章二段)との整合性を思えば、その<宇治の女>を右近や侍従に当て込むことも有り得たのではないかと、とも私は考えたが、下文に薫殿自身がその<宇治の女>を「かすかにて居たる人」と自分が世話して事情を知る情人と同一人物であるかに隨身に告げているので、道定の相手の女も常陸姫だ、という筋書きで、この事態を薫殿は隨身に飲み込ませようとした、のは確からしい。女の返書も「赤き色紙のいときよらなる」(六章三段)艶なものだったと隨身は聞き知っているのだから、差出人が若い女であるら

しい察しは付き易く、上臆相手より姫相手という設定が説得力のある事情説明だったのかも知れない。で、薫殿がそのようにして兵部卿宮の関与を伏せたのは、その深い意味は複雑そうなのでともかくも、取り敢えずは、少しでも話を小さく抑えて事態收拾が図り易い様に小者の内記を登場させておいた、という防御策ではあるのだろう。

「さなむはべる(そのようでございます)」と申す(と隨身は申します)。

「宇治へは、常にやこのありけむ男は遣るらむ(宇治へは、道定はいつもその話にあった男を遣わしているのか)。かすかにて居たる人なれば(ひっそりと住んでいる女なので)、*道定も思ひかくらむかし(道定も寂しがらせているかと心配なのだろうな)」 *「道定も思ひかくらむかし」は注に<『集成』は「仲信の女をさし措いて、浮舟に思いを寄せたか、と推察する体の発言」と注す。>とある。が、道定が妻ある身でありながら気が多い、という人物像は、道定の女遊びという虚構を組み立てる前提として仕込んだ出汁なのであり、もうとっくに仲信の娘の出番は終わっている。今や道定は大将殿と女を取り合う敵役となっていて、是は薫大将が道定を自分と張り合う相手として<困ったヤツだ>と考えている体の発言だ。

と、うちうめきたまひて(と薫殿は事態を思い悩むように低く仰って)、

「人に見えでをまかれ(誰も来ない内に行け)。*をこなり(こういう事情が洩れると、見苦しいからな)」 *「をこなり」は、何も今さら隨身が文遣いすることを家人に知られて困る筈も無いので、殿がこのように文遣いと曰く有り気に密談していることを家人に見られて、何かと勘繰られ、遂には三角関係が周囲に知られ、遂には真相まで明るみになるとすれば、誰にとっても非常に不都合だ、と薫殿は懸念して言ったのだろう。

とのたまふ(と命じなさいます)。かしこまりて(隨身は畏まって承り)、*少輔が常にこの殿の御こと案内し(式部少輔道定が常にこの殿の御動向を調べて)、かしこのこと問ひしも思ひあはずれど(宇治山荘の様子を聞いていたことも話に符合したが)、もの馴れてえ申し出でず(馴れ馴れしく申し上げることは出来ません)。君も(薫君も)、「下衆に詳しくは知らせじ(遣い走りに詳しい事情は知らせまい)」と思せば(とお思いになって)、問はせたまはず(それ以上の話は為さいません)。 *「少輔」は「せう」ではなく「せうふ」と読みがある。「式部少輔」と所属を明示したときは「しきぶのせう」と略すが、「少輔」と階級だけ呼ぶ時は「せう」では何のことを言っているのか分かり難いのだろう。ともあれ、隨身は敵の手紙の主を式部少輔道定朝臣と思い込んだようだ。

かしこには(山荘の姫は)、御使の例よりしげきにつけても(大将の使者がいつもよりも頻繁に来るだけでも)、もの思ふことさまざまなり(何か予定が変わったのか、まさか不貞が知られたのか、と落ち着かずに考えることさまざまです)。ただかくぞのたまへる(大将殿の御手紙は、ただこのようにありました)。

「波越ゆるころとも知らず末の松、待つらむとのみ思ひけるかな (和歌 51-17)

「不覚にも 松山越えの 波を見た (意識 51-17)

*注に<薫から浮舟への贈歌。明融臨模本「すゑの松」に朱合点。『花鳥余情』は「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」(古今集東歌、一〇九三)。『異本紫明抄』は「越えにける波をば知らで末の松千代までとのみ頼みけるかな」(後拾遺集恋二、七〇五、藤原能通)を指摘。『完訳』は「他者の心に移したと詰問」と

注す。>とある。「すゑのまつやま」は何度か下敷きに引用されている。即ち、「末の松山」と「波越ゆ」との取り合わせは、貞観(ちやうぐわん、慎ましさを尊ぶ意の元号)地震の大津波(貞観 11 年、西暦 869 年)で<まさか>の冠水をしたことを、洒落語用で記念する知恵で<まさかの不貞>と歌詠みしたもの、と見るのは、ほぼ定説らしい。で、実は、2011 年の 3.11 大地震を経た 2013 年 12 月 19 日現在の東京に生きる私にとって、富士山の最大噴火と目されているらしい貞観大噴火(864~866 年)と一連の地殻変動が貞観地震だったことを思えば、何時また富士山の大噴火が起こるのかと、現にマスコミで学者が指摘してもいるが、不安の真っ只中に居る、という巡り合わせなわけだ。が到底、地殻変動に対抗し得る回避策の有ろう筈も無いので、逆にどうも避難生活の実感が持てず、どこかで防災の意識はしつつも、淡々と暮らしている。ところで、何処かの高台の松がちょうど津波の高さの目印になったとして、その木の天辺を<末>と言うのは好いとして、その実際の松を見ることもなかっただろう当時の多くの京都人が、「末の松山」という言い方に何か面白い情緒を感じたとすれば、「すゑ」が何かの掛詞になっていたような気はする。それが何かを示す説明は今まで見かけなかったが、今回のウェブ検索で「はてノ鹽竈(しおがま)」ブログサイトにく「末の松山」も、実は「陶(すえ)の松山」であったりすると面白くなって来るのですが>と、「すゑ」が渡来人系の陶工技師一族に由来するかの示唆があって興味深かった。尤も、そのサイトは<深入りは避けておきますが>と言割りがあって、私もこれ以上は深入りしない。

人に笑はせたまふな(私を笑いものにしないで下さい)」

とあるを(とあるのを)、いとあやしと思ふに(いつもとまるで違うと思うと)、胸ふたがりぬ(姫は胸が詰まります)。御返り事を心得顔に聞こえむもいとおつまし(御返事を心当たりがあるように申し上げるのも、不貞を認める事になって、とても畏れ多く)、*ひがことにてあらむもあやしければ(心当たりが無い事として言い訳申すのも不審を買いそうなので)、御文はもとのやうにして(御手紙は閉じ直して)、 *「ひがこと」は<事実と違ったこと=誤認>。「ひがことにてあらむ」は<間違いだろう=心当たりがない>だが、それは嘘なので、そういうことにして言い訳する、という意味になるようだ。

「所違へのやうに見えはべればなむ(この御手紙は宛先違いのように思われます)。あやしく悩ましくて(変に気分が優れませんで)、何事も(今は何も御返事できません)」

と書き添へてたてまつれつ(と書き添えて姫は御手紙を薫大将にお返し申しなさいました)。見たまひて(薫殿はそれを御覧になって)、

「さすがに、いたくもしたるかな(それにしても、上手く言い逃れして来たものだ)。かけて見およばぬ心ばへよ(思った以上の機転だな)」

とほほ笑まれたまふも(と愉快にお思いなさるので)、憎しとは、え思し果てぬなめり(裏切った姫を憎み切れずにいらっしゃるようです)。

[第六段 右近と侍従、右近の姉の悲話を語る]

まほならねど(はっきりとはではないが)、ほのめかしたまへるけしきを(姫の不貞の疑いを仄めかしなさいている大将殿の文面だったのを)、かしこにはいとど思ひ添ふ(姫はますます考え込みます)。「つひにわが身は(とうとう私は)、けしからずあやしくなりぬべきなめり(不徳の女とな

って身を滅ぼしてしまいそうだ)」と、いとど思ふところに(と深刻に思うところに)、右近来て(右近が遣って来て、こう申します)、

「殿の御文は、などで返したてまつらせたまひつるぞ(殿の御手紙は如何してお返し申しなさったのですか)。*ゆゆしく(とても失礼で)、忌みはべるなるものを(畏れ多いことですのに)」 *「ゆゆし」は《「ゆ」は神聖の意の「斎(ゆ)」と同語源》とデジタル大辞泉(goo 辞書)に解説がある。「神聖」は<尊くしておかしがたいこと。清浄でけがれがないこと。>とあるが、具体的には天災などの人智が及ばない圧倒的な物理力を恐れる意識や態勢かと思われ、だから「ゆゆし」は<忌避すべき>と考える事物である前に<恐ろしい>と感じるものでありそうだ。が、此处では「ゆゆしく忌みはべる」とあって、その<忌まわしき=恐ろしき>は他語で語られているので、是は目上の人に苦言を呈する婉曲表現としての「ゆゆし」だろうから、具体認識を離れて<非常に大変なこと>という強調語用であり、苦言であってみれば<非常に不都合なこと=社会規範に外れる=失礼なこと><くらの言い方になるのだろう。また、注には<『完訳』は「手紙を返すのは禁物とされる。相手を傷つけ、絶交を意味する」と注す。>とある。ただ、手紙の返却が絶対に避けなければいけないことなら、右近は姫の返却事自体を止めた筈で、仮に右近が居ない時のことであっても、侍従なり誰か他の上臈が取り次ぐ筈で、上臈が大將殿への返信に付いて、そんな重大な姫の失態を見過ごすとは思えない。だから、此处での諫言は非難ではなく、手紙の返却は一般にあまり好ましいことではないのに何故そのようなことをなさったのですか、と後になってから理由を尋ねているのであって、それは即ち、私でよければ相談に与りますが、という水向けなのだろう。

「ひがことのあるやうに見えつれば(分からない事が書いてあって、変な御手紙のように見えたので)、所違へかとして(宛先違いかと)」

とのたまふ(と姫は仰います)。あやしと見れば(右近は殿の御手紙が閉じられたまま返されるのを、変に思って)、*道にて開けて見けるなりけり(使者に手渡す前に盗み読みしていたのです)。*よからずの右近がさまやな(良くない右近のクセですねえ)。見つとは言はで(しかし右近は当然に、読んだとは言わずに)、 *「みち」は<途中>。やはり、右近本人が取り次いでいたらしい。しかも、盗み読みしていたのだ。殿の文面を承知の上で、それを返した姫に「ゆゆしく忌みはべるなるものを」と言うのは、如何にも右近の、というより側近女房のかもしれないが、意地悪さだ *「よからずの右近がさまやな」は凄く珍しい言い方に聞こえる。まるで、女房の日常語そのままのようできえある。特に末尾の「やな」は今の関西語と同じように見える。非難はしているが、それよりもこの親近感のある言い方に、これがまるで女房が日常的にしている当たり前の事という響きを感じて、そのように事情を熟知していなければ側近などは務まらない、という自負さえありそうだ。が、信書を盗み見るなど有り得ない、というのが公式の約束事なので、バレれば信用を失い失職するし、場合によっては本当に首が飛ぶ。

「あな(まあそれは)、いとほし(気になりますねえ)。苦しき御ことどもにこそはべれ(難しい御事情がございますから)。殿はもののけしき御覧じたるべし(殿は兵部卿宮の割り込みをお知りになったのかもしれない)」

と言ふに(と言うと)、面さと赤みて、ものものたまはず(姫は顔色をさっと赤めて何も仰いません)。文見つらむと思はねば(姫は右近が手紙を盗み見したとは思わないので)、「異ざまにて(殿の御手紙とは別に)、かの御けしき見る人の語りたるにこそは(殿が疑っているらしい御様子を見た殿の女房などが右近に話したのだろう)」と思ふに(と思っただが)、

「誰れか、さ言ふぞ(誰がそんなことを言ったのですか)」

などもえ問ひたまはず(などと問い詰めなされることも出来ません)。この人びとの見思ふらむことも、いみじく恥づかし(側近女房の右近や侍従が、殿が兵部卿宮との不貞に気付きなさったと知ること、姫は非常に落ち着きません)。わが心もてありそめしことならねども(兵部卿との仲は、自分が仕向けたことではないが)、「心憂き宿世かな(確かに私は宮に心惹かれていますので、気が重い人生だ)」と思ひ入りて寝たるに(と姫が思い詰めて寝ていると)、侍従と二人して(右近は侍従と二人して、姫の枕元に寄って)、

「右近が姉の(私の姉が)、常陸にて、人二人見はべりしを(常陸で男二人と情を通じましたが)、ほどほどにつけては(姫と女房では相手の男に身分の違いこそあるものの)、ただかくぞかし(男女の仲の難しさは全く同じです)。これもかれも劣らぬ心ざしにて(どちらの男も引かず張り合って)、思ひ惑ひてはべりしほどに(姉は困っていましたが)、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける(女心に新しい男の方に少し惹かれています)。それに妬みて(前の男はそれを妬んで)、つひに今のをば殺してしぞかし(遂に後の男を殺してしまいました)。さて我も*住みはべらずなりにき(それで、殺した方の前の男も姉の許に通って来れなくなりました)。*「住みはべらず」は<男が常陸国に住んでいられなくなった>という事かと思つたら、下にその事は語られていて、ではこの「住む」は何を言っているのかと思つたら、大辞泉に<(妻問婚(つまどいこん)が行われていた時代に)男が夫として女の家に通う。>という語用が示されていた。

国にも、いみじきあたら兵一人失ひつ(国司にとっても、あたら優れた兵士であった後の男を一人失ったのです)。また、この過ちたるも、よき郎等なれど(そして、殺めた男の方も誠実な家来でしたが)、かかる過ちしたる者を、いかでかは使はむ(このような常軌を逸した者をどうして雇えよう)、とて、国の内をも追ひ払はれ(と国外追放となり)、すべて女のたいだいしきぞとて(それもこれも、元は女のだらしなさの所為だということ)、館の内にも置いたまへらざりしかば(姉は守家に殿から置いて頂けなくなって)、東の人になりて(常陸の地侍に嫁ぎ、東国人となって)、*乳母も、今に恋ひ泣きはべるは(母の乳母が今でも姉を恋しがって泣いておりますのは)、罪深くこそ見たまふれ(罪深いことと存じられます)。*「めのと」は注に<右近の母。浮舟の乳母。右近は浮舟と乳母子の関係。>とある。この関係を説明した文が、これより前のどこかにあって脱稿している、のであれば、此処でこういう言い方をして、事情がわかる読者の居るはずはない。

*ゆゆしきついでのやうにはべれど(姫君の御事情を、こういう忌まわしい話と同じように言うのも恐縮ですが)、上も下も(かみもしもも、身分の高い姫君にしても低い姉にしても)、かかる筋のことは(こういう三角関係は問題で)、思し乱るるは(姫がお悩みになるのは)、いと悪しきわざなり(とても始末の悪いことです)。*御命まだにはあらずとも(御命にまで関わることはないとしても)、人の御ほどほどにつけてはべることなり(姫も大将も兵部卿も、それぞれの御立場には関わることです)。死ぬるにまさる恥なることも(事の露見が死ぬよりも恥になることも)、よき人の御身には(高い身分の方にとっては)、なかなかはべるなり(却ってあることでございます)。一方に思し定めてよ(姫君はどちらか御一人にお決めなさってください)。*「ゆゆしきついでのやうにはべれど」の主語は分かり難い。が、是は一般論ではない。この文の主旨は「思し乱るるはいと悪しきわざなり」で、「思し乱るる」の主語は敬語遣いからしても聞き手の姫君で、「乱るる」は「乱る」の連体形だから<(姫君がお悩み

になる)こと>で、それが「いと悪しきわざなり(とても都合の悪いこと)」という意見が右近の主張だ。ということは、「ゆゆしきついで」はく上に述べた姉の忌まわしい話に関連付けること>だから、「やうにはべる」の主意格はく姫の御こと>だろうが、だとすると「はべる」に敬語遣いがないので、形式上の主語はく姫の御事情について右近が意見を申し上げること>だろうと思われる。また、「ついでのやうにはべれど」はそのままくついでのように言うのは恐縮ですが>と言い換えても、現代語でもく大事な話をものついでのように言うのは恐縮ですが>という意味の日常会話での慣用句だが、会話文を分かり易くするために主語や目的語を補語するのは言い換えに於ける主要な作業なので、この「かしこし」の形容詞も明示補語する。 *「おおんいのち」の「御」は「人」に対する敬称で、「人」は「御ほどほど」と複数なので、この「御」は姫だけでなく、大将殿や兵部卿宮も含まれる。

宮も御心ざしまさりて(兵部卿宮も大将殿より御愛情が強くて)、*まめやかにだに聞こえさせたまはば(正式に結婚をお申し込み下さるなら)、そなたさまにもなびかせたまひて(そちらにお決めなさって)、ものないたく嘆かせたまひそ(殿への失礼に付いては、あまり深く思い詰めなさいますな)。痩せ衰へさせたまふもいと益なし(思い悩んで、痩せ衰え為さるのも何も良いことはありません)。さばかり*上の思ひいたづききこえさせたまふものを(あれほど母上様が姫君の御病状を心配なさっていらっしゃったではありませんか)。*乳母がこの御いそぎに心を入れて(私の母の乳母が大将殿から御指示のあった新居への御引越準備に熱心になって)、惑ひみてはべるにつけても(右往左往して居りますのにつけても)、*それよりこなたに(その新居より此方の家へ)、と聞こえさせたまふ*御ことこそ(と申しなさる兵部卿の隠し事になさっている御姿勢が)、いと苦しく(とても困るし)、いとほしけれ(厭なのです) *「まめやかにだに」の「だに」の切望は、兵部卿がもう事態が大将殿に知れたらしいこの期に及んでも、まだ自身が表立って事の收拾を図ろうとせずに、密事のまま姫を困らせ続けていることに対する、右近の反感というか怒りみたいな思いが示されているのだろう。「まめやか」は此処ではく正式だ。公式だ。=様式に則った格式ある結婚申し込み>を指すようだが、受領家の娘を親王が正式に妻に迎えることは身分制度の秩序に反するので不可能だ。常陸姫は女房待遇が相当で、女房は出向いて仕えるもので、主人が迎え取る女ではない。だから、大将に囲われて宮家に出向ける筈もない常陸姫に手を出した匂宮は本当に罪深い。 *「うへ」は姫の母上である前常陸守の北の方のことらしい。「思ひいたづききこえさせたまふ」は母君が山荘から帰る際に「さるべき御祈りなどせさせたまへ。祭祓などもすべきやう」(五章七段)と姫の不調を心配していたことを言っているのだろう。恋の病には祈祷や祓えなど効かないが、姫の決断こそが唯一の良薬だ、みたいなことか。 *「乳母」は「まま」と読みがある。実母を親しんで言う呼称だろうか。 *「それよりこなたに」は注にく薫に迎えられる前に匂宮の方に、の意。主語は匂宮。「きこえ」の対象は浮舟に。>とある。 *「おおんこと」はく兵部卿の為さり様>で、それが「まめやか」でない事が右近にとっては不満の種らしい。

と言ふに(と言うと)、いま一人(もう一人の侍従は)、

「うたて(うわっ)、恐ろしきまでな聞こえさせたまひそ(そんな怖い話まで姫にお聞かせなさいますな)。何ごとも御宿世にこそあらめ(大将とのことも兵部卿とのことも、すべてはこうなる御宿命にあったんでしょうから、そんな突き詰めたものの言い方をなさらずに、上手くまとまる方策を考えましょうよ)。ただ御心のうちに(とにかく姫ご自身が)、すこし思しなびかむ方を(より心惹かれなさる方のほうを)、さるべきに思しなせたまへ(お選びなさいませ)。いでや(いえもう)、いとかたじけなく(それは有難く)、*いみじき御けしきなりしかば(大変畏れ多い宮様の御愛情ぶりでいらっしゃったので)、*人のかく思しいそぐめりし方にも御心も*寄らず(大将が新居を用意なさったことにも姫はお気持ちが動かずにいらっしゃるから)、*しばしは隠ろへても

(暫く隠れ住むことになっても)、御思ひのまさらせたまはむに寄せたまひね(姫の御心が引かれなざる宮様が仰る隠れ家にお移りなされませ)、とぞ思ひえはべる(とあって居ります)」 *「いみじき御けしきなりし」は実際に侍従が見知った<宮の御様子>を言う言い方のようで、であれば、あの船宿遊びで襖一枚の近さで聞き知った<宮の激しい情交ぶり>が念頭にありそうだ。侍従自身も時方と良い仲になっただけで、思い入れは一入なのだろう。ところで、「御けしきなりしかば」の「しかば」だが、この「しか」は過去の助動詞「き」の已然形のように、接続助詞「ば」は<(～だった)ので>という理由提示の条件項文を成し、その論理展開は「御思ひのまさらせたまはむに寄せたまひね」という意見に結論するので、以下「思ひえはべる」までは一文だ。 *「人」は大將だろうが、この「ひと」という語感に熱気は無い。 *「寄らず」の連用中止は下に<に居たまひて>などが省かれた挿入句の追加条件項なので、此処で句点は置けず、読点で下文に続く構文だ。 *「しばしは隠るへても」は右近が姫の日陰生活を憎むのに比して、侍従は時方とのこともあってか、兵部卿びいきで、その親王身分の堅苦しさに同情して現実的な解決策を取ろうとする姿勢の現れ、のようでもある。

と(と侍従は)、宮をいみじくめできこゆる心なれば(宮を非常に称え申す気持があるので)、ひたみちに言ふ(ひたすら兵部卿宮の方をお勧め申します)。

[第七段 浮舟、右近の姉の悲話から死を願う]

「いさや(さあどうなのでしょう)。右近は、とてもかくても(私、右近はどちらにしても)、事なく過ぐさせたまへ(姫君が無事にお暮らしたまへよう)、初瀬、石山などに願をなむ立てはべる(初瀬や石山の観音様に願掛けしております)。

この大將殿の御荘の人びとといふ者は(此処に出入りする大將殿の荘園の人たちは)、いみじき *無道の者どもにて(非常に粗暴な者たちで)、 *一類この里に満ちてはべるなり(同族がこの里一帯に大勢居ます)。おほかた、この山城、大和に、殿の領したまふ所々の人なむ(大方のこの山城国と大和国の殿が所領なざる荘園の管理人たちは)、皆この *内舎人といふ者のゆかりかけつはべるなる(皆この山荘を警護している内舎人という者の縁者に連なっているようです)。 *「無道」は「むたう」と読みがある。大辞林には「むだう」で< [名・形動] 行いが人の道にそむいていること。道理にはずれていること。また、そのさま。非道。 >とある。「御荘の人びと」について、特には非道な振る舞いは今まで語られて居ないので、右近がどういうことを言っているのか分からない。ざっと、乱暴・粗暴くらいに言って置く。 *「一類」は「ひとるい」と読みがある。が、古語辞典には「いちるい」の項に<同族。一門。 >とある。 *「内舎人(うどねり)」は古語辞典に<「うちのとねり」「うちとねり」の転、「とね」は近侍官人。「うち」は禁内の意で、「大舎人(おほとねり)」に対していう >と語説があり、役職については<中務省に属する職。帯刀して朝廷の宿衛や雑役に従い、行幸の時は左右前後に供奉して警護する官人。公卿の子弟、また後には源氏・平氏の中から選んでこれに当てる。重臣に隨身として賜われることもあり、是を「内舎人隨身」という。 >とある。「この内舎人」とは文遣いの隨身のことなのだろうか。大舎人は下級役人だったので、内舎人は上級職だろうか。雑役や警護というと、蔵人や衛府との兼ね合いは如何なのか分かり難い。語感では蔵人は帝の私的な用人のようだし、衛府は軍で舎人は警察のような違いもありそうだが、実際に何が違うのかはさっぱり分からない。また、「舎人」は<天皇・皇族などの近侍として、雑事をとりしきった者。撰閔以下、貴族にも抱えることを許された >と古語辞典にあるので、「この内舎人」は大將家から派遣された山荘の家司を非公式に呼称していたのかもしれない。「この」という言い方は<この山荘に属する >という意味のようにも聞こえる。一応そんな風にとって置くが、分からないし、注釈も無い。

それが婿の*右近大夫といふ者を元として(その内舎人の婿の右近大夫という者を元締めとして)、よろづのことをおきて仰せられたるななり(その者に殿は全ての指示を言い付けなさっているようです)。*よき人の御仲どちは(身分の高い兵部卿と大将の御仲では)、情けなきことし出でよ(相手を情け無い目に遭わせてやれ)、と思さずとも(とお思いにならなくても)、ものの心得ぬ田舎人どもの(事情を知らない田舎者たちが)、宿直人にて替り替りさぶらへば(宿直人として代わる代わる仕えていますので)、おのが番に当りて(自分の当番の時に)、いささかなることもあらせじなど(少しも落ち度の無いようにと)、過ちもしはべりなむ(宮を不審者として傷め付けるような、過失も仕出かしましよう)。 *「うこんのたいふ」は注に<内舎人の婿で右近大夫という者。薫は右大将なので、その直属の部下。>とある。 *「よき人の御仲どちは」は注に<身分の高い匂宮と薫の間柄では、の意。>とある。

ありし夜の御ありきは(先だつての夜の御外出は)、いとこそむくつけく思うたまへられしか(本当に心外に存じられました)。宮は、わりなくつつませたまふとて(宮は無理やり事をお隠しなさろうとして)、御供の人も率ておはしまさず(御供の人も連れていらっしゃらず)、やつれてのみおはしますを(身分の分からぬ狩衣姿でいらっしゃったので)、さる者の見つけたてまつりたらむは(莊園の警護の者が見付け申し上げたら、どんな乱暴を働いただらうかと)、いといみじくなむ(それは非常に心配致しました)」

と、言ひ続くるを(と語り続けるのを)、君(姫君は)、「なほ、我を(やはり私を)、宮に心寄せたてまつりたると思ひて(宮に心寄せ申ししていると思つて)、この人びとの言ふ(この人たちは言っている)。いと恥づかしく(私がそんな男好きの女と見られているのは、本当に恥づかしく)、*心地にはいづれとも思はず(私は貴人のお二人に誠実にお応え申そうとしているだけで、私の方からどちらが如何などとは考えていない)。 *「心地にはいづれとも思はず」は<どちらが良いとは思っていない>という意味にも取れる言い方だが、此处では右近と侍従に「一方に思し定めてよ」(六段)とか「しばしは隠るへても御思ひのまさらせたまはむに寄せたまひね」(六段)とか、姫の決断を迫つ突かされている場面なので、姫は<自分の方からは、どちらとも決められない>と受身の立場を改めて持ち出して、決定を避けているのだろう。確かに、受身で推移して来た事態であることは事実なので、その認識の正しさを以て、辛い気持を慰めて護身しようとしているのだろうが、経緯を正しく認識するだけで解決できる問題などない。それに、姫は自分の気持ちもはっきりと分かっている。「いと恥づかしく」とは言うものの、侍従が言った「いみじき御けしきなりしかば、人のかく思しいそぐめりし方にも御心も寄らず」(六段)は凶星だ。また、二章四段の宮との初めての情交に姫は「夢の心地するに」とあったことが決定的にこの人の運命を変えた、のだろう。姫を多情な女とまでは決め付けられないが、宮との情交に女冥利を得てしまったことは、その気持に欺いて生きる事が意味の無い人生になる、と姫を苦しめた。何故苦しむのか。それは、宮を受け入れる事が大将を裏切ることになるし、義理を欠くだらしない生き方だという価値観も姫にはあったからだ。だから、宮の割り込みが迷惑なだけだったら、それこそ右近たちに相談するなり訴えるなどして、姫は宮を拒絶したはずだ。で、そういうことにはなっていないので、右近も侍従もその姫の気持を汲んで「ものないたく嘆かせたまひそ(不義理に付いてはあまり気に為さいますな)」(六段)とか「ただ御心のうちに、すこし思しなびかむ方を、さるべきに思しならせたまへ」(六段)と勧めていた。この場の女三人は、宮に付くべきだ、とは思っている。が、右近が言うように、姫が此处から脱走することは非常に困難だ。兵部卿に正式な迎えを立ててもらいたいのは体面からではなく、実際の移動上の安全性を考えてのものだ。が、それは無理だ。恐らく唯一の解決策は、兵部卿が大将に姫を譲ってくれと正面切って頼み込み、姫からも嘆願し、大将が納得して、姫を宮家の女房として送り届ける、という筋だろう。大将の出方次第で全てが決まるし、断わられて宮が引き下がれなければ亀裂は

決定的だし、女のことで出し抜くどころか借りを作ることもなるし、場合によっては命懸けなので、そういう重圧が掛かる交渉を宮が大将に切り出すのは容易ではない。また、それを宮に迫る重責を姫が負えるのか。姫も意志を示す責任がある、とは思いますが、それこそ受身の経緯を思えば、決断を迫るのは如何にも酷に見える。

ただ夢のやうにあきれて(私はただ夢を見るように呆然として)、いみじく焦られたまふをば(宮が強く私を恋焦がれ為さるのを)、などかくしも、とばかり思へど(なぜこれほどにもと受け止めたが)、頼みきこえて年ごろになりぬる人をお頼り申して年を経た大将殿を、今はともて離れむと思はぬによりこそ(これきりにして離れよう地は思わないので)、かくいみじともものも思ひ乱るれ(こんなに深く悩んでいるのだ)。げに(しかし、確かにこのままで)、よからぬことも出で来たらむ時(変な事件になったら困る)」と、つくづくと思ひゐたり(と考え込んでいました)。

「まろは、いかで死なばや(私はもう死んでしまいたい)。世づかず心憂かりける身かな(普通じゃない辛い人生だ)。かく、憂きことあるためしは(こんな嫌な話は)、下衆などの中にだに多くやはある(下層の者にも多くはないだろう)」

とて、うつぶし臥したまへば(と言って姫がうつ伏してしまいなさると)、

「かくな思し召しそ(そんな風にお考えなさいませ)。やすらかに思しなせ(殿が兵部卿との事をお知りになっても、ご安心なさるように)、とてこそ聞こえさせはべれ(と申上げて申上げたのです)。思しぬべきことをも(以前はもっとご心配なさっても良さそうなことがあっても)、さらぬ顔にのみ(気にしていないように)、のどかに見えさせたまへるを(落ち着いていらっしゃったのを)、この御事ののち(お引越しが決まってからは)、いみじく心焦られをせさせたまへば(ひどく神経質でいらっしゃるので)、いとあやしくなむ見たてまつる(とても心配申し上げております)」

と、心知りたる限りは(と事情を知るこの三人は)、皆かく思ひ乱れ騒ぐに(皆このように思い悩んでいたが)、乳母、おのが心をやりて(乳母は引越しを心待ちにして)、物染めいとなみりたり(染物などをしていました)。今参り童などのめやすきを呼び取りつつ(新参の童女の可愛らしい子を姫の前に呼び寄せて)、

「かかる人御覽ぜよ(こういう元気な子を御覧なさい)。あやしくてのみ臥させたまへるは(気分が悪いとばかり仰って臥せっていらしては)、もののけなどの、妨げきこえさせむとするにこそ(物の怪が引越しの邪魔をし申しますぞ)」と嘆く(と嘆きます)。